

大坂文楽藝人新橋演舞場

木下八味人線形遺全貨多越興行

（り替日五題外）候り仕續演でま日四月八付に評好



第五回外題（二十一日より二十五日まで）

（毎日四時開演）

本朝廿四孝

十種香の段

娘八重垣姫	武田勝頼	腰元濡衣	長尾謙信	白須賀六郎	原小文治
竹本織太夫	竹本つばめ太夫	竹本宮太夫	竹本つばめ太夫	竹本松島太夫	竹本津磨太夫

狐火の段	娘八重垣姫	武田勝頼	腰元濡衣	長尾謙信	白須賀六郎	原小文治
竹本織太夫	竹本つばめ太夫	竹本宮太夫	竹本つばめ太夫	竹本松島太夫	竹本津磨太夫	竹本伊達太夫

西亭譚作並作曲 軍神の偲ぶ

母キミ刀自	加納俊夫	田鶴子夫人	安場吏員
吉田榮三	吉田玉市	吉田榮三郎	吉田小兵吉

娘八重垣姫	武田勝頼	腰元濡衣	長尾謙信	白須賀六郎	原小文治
竹本織太夫	竹本つばめ太夫	竹本宮太夫	竹本つばめ太夫	竹本松島太夫	竹本津磨太夫

御所櫻堀川夜討

一卿の君	一侍從太郎	一妻花の井	一腰元しのぶ	一女房おわさ	一武藏坊辨慶
吉田玉男	吉田玉徳	桐竹紋太郎	桐竹紋太郎	吉田光造	吉田玉助

辨慶上使の段

一十次兵衛の母	一女房お早	一濡髪長五郎	一平岡丹平	一三原傳藏	一南方十次兵衛
吉田小兵吉	吉田文五郎	桐竹門造	桐竹玉徳	吉田榮三	吉田榮三

八幡里

中	竹本七三太夫	竹本網造	古靱太夫	清六
---	--------	------	------	----

引窓の段

澤市	座頭澤市	女房お里	觀世音
竹本相生太夫	竹本南部太夫	竹本越名太夫	竹本吉五郎

壺阪

澤市	座頭澤市	女房お里	觀世音
竹本相生太夫	竹本南部太夫	竹本越名太夫	竹本吉五郎

寺まで

澤市	座頭澤市	女房お里	觀世音
竹本相生太夫	竹本南部太夫	竹本越名太夫	竹本吉五郎

澤市内より御寺まで

一座頭澤市	一女房お里	一觀世音
桐竹政十郎	桐竹紋十郎	桐竹紋司

新橋演舞場

◆類半等各りに休園の生學◆
八五七・七五七座銀話電

（む含を割九税内）錢五十三圓七等一
（同割六同）圓四等二
（同割六同）錢十四圓二等三
（同割四同）錢十圓一等參

料場入御
（共税）

胃腸疾患

ヒオゲ錠



ライオン製薬株式会社

大後天樂座 人稱獨綱五反

全資利戲樂行



第五回

新橋演舞場

親切感謝明る帝都

愛國百人一首

初春の初日かゞよふ神國の神のみかけをあふげもろもろ

八束穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ

遠つ祖の身によりひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉

大日本神代ゆかけて傳へつる雄々しき道ぞたゆみあらすな

青海原潮の八百重の八十國につぎてひろめよ此の正道を

一方に靡きそろひて花すゝき風吹く時ぞみだれざりける

安見しゝわが大君のしきませる御國ゆたかに春は來にけり

かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや

荒木田久老

橘千蔭

上田秋成

栗田士滿

蒲生君平

賀茂季鷹

平田篤胤

香川景樹

大倉鶯夫

藤田東湖

大阪 文樂座人形浄瑠璃芝居

吉例全員引越興行

第五回外題 (廿一日より廿五日まで)

本朝廿四孝

十種香の段より狐火の段

軍空の偲 西亭謹作並作曲
ぶ 佛

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

壺阪觀音靈驗記

澤市内より壺阪寺迄



◇ 座 各 竹 松 の 月 七 ◇

明 治 座	東 京 劇 場	歌 舞 伎 座
一 お目見得だんまり 一 幕 二 赤穂義士審判 三 幕 三 道行初音旅 常磐津連中 竹本連中 四 東海道中膝栗毛 三 幕	一 幻燈部屋 三 幕 二 上羽月の禿 長唄連中 三 下五民われら 三 幕	一 妹背山婦女庭訓 御殿の場 二 素袍落 竹本連中 三 一本刀土俵入 二 幕 四 五屋 清元連中
七月興行大歌舞伎	藝術座水谷八重子一座 日曜晝間興行十一時	恒例尾上菊五郎一座 喜多村線郎 加入 大谷友右衛門 毎夕四時・日曜晝間興行十一時
七・六〇 四・〇〇 二・四〇 一・二〇	六・六五 三・六八 二・〇八 一・二〇	御 観 劇 料 (税共) 九・四〇 六・七〇 四・〇〇 二・四〇 一・一〇

決戦下服装に就き 皆様へ御願ひ

今こそ決戦、一億總蹶起の時、擧げて止まむの氣慨に燃へて戦争生活の實踐に徹底せねばなりません。演劇、演藝、映畫亦決戦下必要不可欠な戦争生活の一部面であることは今更申すまでもなく、隨て御觀覽は戦争生活の一部であり延長であります。

既に戦争生活の延長である以上、御觀覽の御態度、御服装等飽くまで國家の要求に融け込まなければならぬと存じます。

従來、御觀覽の場合、動もすれば服装華美に流れ過ぎると云はれました。平時なら兎も角、此の決戦下に左様のことのあるべき筈はありませんが、然し大勢様御集りの劇場ですから服装は格別目立つな服装を以て場内を御埋め下さい。そして御心豊かに朗らかに、決戦下必要不可欠の健全娛樂を御覽下さいませう。

新調は
見合せ
今後の衣
生活は
かうしま
しよろ

のでありまして、その場合の服装が時代の流行を作るときへ云はれました、事實そうだったのであります。

だから今日御集り下さる皆様が服装の簡素美、剛健美、明朗美に徹底致され率先範を垂るるの思召しで、總て決戦下にふさはしい服装を御召し下さらば、それが一代の風俗を作り逞ましい日本人の心意氣となつて決戦下一億の士氣はいやが上にも昂揚さるるに至りませう。

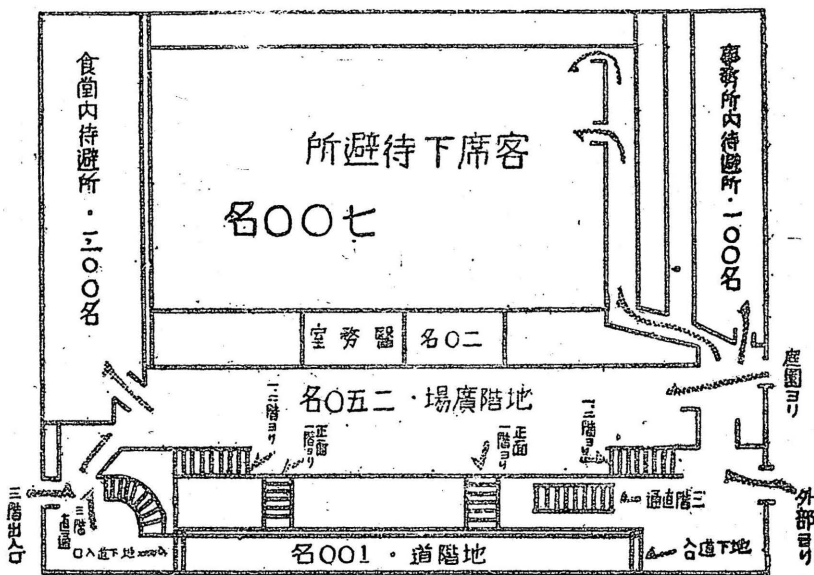
どうぞ皆様。これからは、殿方も、御婦人方も、假りにも绚烂華美などと云ふ舊觀念を美事一蹴し、簡素、剛健、明朗

戰時下興行場ニ於ケル防空上

／措置要綱

○空襲警報發令に依り各興行場の興行中止の際に於ける入場券の取扱に關する件

- 一、興行開始ノ前賣入場券等ノ入場料ハ原則トシテ拂戻
（現金）ヲ爲スコト　但シ相手方ノ承諾ヲ受ケ次回
興行ヲ開始シタル日又ハ特ニ指定シタル日ノ興行ニ
其ノ入場券等チ有効トシテ入場セシムルコト
前項ノ拂戻ハ警報解除後爲スコト
 - 二、興行開始後ノ入場料ハ拂戻（現金）ヲ爲ササルコト
興行開始中興行ヲ中止シタル時ハ其ノ中止時期ガ一
回興行ニ要スル時間ノ概ネ三分ノ二ヲ經過セサル場
合ハ其ノ入場券等チ以テ再入場又ハ割引入場ヲ爲サ
シムルコト
 - 三、但シ假設興行、巡回興行又ハ空襲ニ依リ興行場被害
ヲ受ケ其ノ他興行再開不能ナル時ハ其ノ入場券ハ無
効トス
 - 四、再入場ハ次回同種興行チナス時ハ殘存番組ノ興行ニ
限り有効トス
 - 五、割引入場料ハ其ノ入場券等ノ料金ノ半額以下トシ次
回興行ノ全番組ヲ觀賞セシムルコト
- 其の他當局より興行時間入場人員及入場料に關し特に指
示ありたる時は其の指示に依ること



乍 憚 口 上

御ひゐき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扱て當る七月興
行の儀は當場吉例により大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有
の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふことゝ相成り候

今度も太夫、三味線、人形遣全員上京致し名曲數々選擇の上豪壯華
麗なる配列をなし十分に古典の妙味を發揮致す事に苦心罷在候へば
必ずや御期待に添ひ得るものと確信仕候 何卒倍舊の御引立を以て
陸續御來場の上御批判御評判の程伏て奉懇願候

昭和十八年七月吉日

文 樂 座 敬 白

昭和十八年七月一日初日

毎夕四時開演

外題五日目替り

◎各等學生團體に限り半額

御 觀 劇 料

- 一 等：(御一名)：七圓三十五錢(稅九割共)
- 二 等：(御一名)：四 圓(同六割共)
- 三 等：(御一名)：二圓四十錢(同)
- 三 階：(御一名)：一圓十錢(同四割共)

所扱取符切

銀座地下鐵街芝居切符賣場
ブレイカイド各店取扱
電話銀座一八一七六九七〇
銀座本店電話京橋一五〇一三まで

切符賣場用
事務所用
お客用

電話銀座 七五八七
電話銀座 一九〇

木挽町

新橋演舞場

友呂 夫呂
改花 改賀
メ太メ

[illegible]

人形遺連名

[illegible]

文 樂 鑑 賞 手 引

文樂の鑑賞に役立ちそうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと云つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おおよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、

この三四十年来、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶暦あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと云はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達し

て來たかといふに、さうではなかつた。人形を遣ふといふこと、これはずっと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことにある。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と云へるでせう。これに對して三味線は永祿中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが

提携し、慶長の初年あたりは、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、云はば立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに属する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これ

も歴史的に云ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデグノボーから肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がかりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。今日から大凡二百年前にあたる。但し文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載さ

れてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた。慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪

文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、その以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。

二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の

場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はず、幕の蔭から人形を差上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。

けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣蔵」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より拔萃)



十種香の段

本朝廿四

孝

十種香の段

娘 八重垣 姫 竹本織太夫
 武田勝頼 豊竹つばめ太夫
 腰元 謙衣 豊竹宮太夫
 長尾 謙信 豊竹つばめ太夫
 原白 須賀六郎 豊竹松島太夫
 小文 治郎 鶴澤觀西翁

人形

武田勝頼 桐竹龜松
 娘 八重垣 姫 桐竹紋十郎
 腰元 濡衣 吉田榮三郎
 長尾 謙信 桐竹門造
 白須賀六郎 吉田多三郎
 原小文 治郎 吉田玉男

狐火の段

ツ

人形

竹本伊達太夫
 野澤喜左衛門
 竹澤 園六
 友花改メ
 琴 野澤 燕三
 野澤 錦糸
 娘 八重垣 姫 桐竹紋十郎

『本朝廿四孝』は明和三年正月十四日
 初日で大阪竹本座の勾欄に掛かつた淨瑠
 璃で、作者は近松半二を志に三好松洛ほ
 か四人で、全五段から成り、此度の謙信
 信は四の切に當りますが、こゝへ来る迄
 の趣向を難と申上げて見ると、初段には
 武田の重寶諏訪法性の兜の事から不和だ
 った武田上杉兩家が、將軍義晴と北の方
 手弱女御前の取做で和解し、八重垣姫と
 勝頼の縁組が定まる件や義晴が鐵砲獻上
 に來た浪人に殺され、賤の方は曲者に奪
 去られる件、信玄と謙信は將軍暗殺の曲
 者詮議に三ヶ年の暇を乞、夫で知れな
 かつた時は各々一子勝頼、景勝の首を討た
 うと誓ふ件があり、二段目は武田の奥家
 老板垣兵部が車力簀作を助けたり、長尾

の家來を殺した無頼漢横蔵が、思ふ仔細
 あるらしい景勝に宥された後、異形の老
 人即ち齋藤道三に簀作を與へられて再會を
 約したりする諏訪明神社頭の條から義晴
 暗殺後已に三年を経過したが、未だに曲
 者が分らぬ爲、村上義清が勝頼の首受取
 に乗込むので、信玄の室は盲目の勝頼と
 戀人の濡衣を逃がさうとするが義清に見
 破られて勝頼は自殺する。其處へ、勝頼
 に生寫の簀作を身代に連れて來た板垣兵
 部、已に勝頼が自害した後なので、怒つ
 て簀作を斬らうとするが、簀作は眞の
 勝頼で死んだ勝頼は實は兵部が子、つま
 り兵部が己が子と勝頼を取替へ、眞の勝
 頼を簀作として信濃へ追遣り、武田家横
 領を狙つて居たもので、其逆心を知つた

信玄の爲に兵部は刺され、勝頼の簀作は身分を偽つた儘、濡衣と共に法性の兜の證議に旅立つの條迄です。

三段目は、武田長尾の境目争ひに次いで、例の桔梗ヶ原から勘助隠家まで、外題の『本朝廿四孝』は、此件に支那の廿四孝の王祥、孟宗、郭巨の故事が換骨奪胎して用ひられた所から來て居るのです。

四段目は、簀作と濡衣の「逆行似合の女夫丸」や和田山別墅の條があり、次で此度上演の十種香になるのです。

『行水の流れと人の簀作が……で、簀作實は武田勝頼が出て、我民間に育ち人に面を見知られぬを幸ひ、花作と成つて入込みしは幼君の御身の上に若し過のあらんかと、他所ながら守護する某、それと悟つて抱へしや、はて……と不審する折から、館の息女八重垣姫は、許嫁の勝頼が切腹したといふので、其繪姿に經文讀誦の鈴の音高く、他方では又、腰元濡衣が位牌に掌を合

はせてゐる。

其物音に勝頼の簀作も、我身代に立ち偽りの勝頼の命日は今日よと、心に願生菩提を念じる。と、姫は繪姿に向ひ、戀ひて焦れて呻き泣く。勝頼は、あの泣聲は八重垣姫と、其の不惑さ可憐しさに思はず涙して立上がる。そこへ駈出たのが濡衣で、似たとは愚か矢張り其儘と、勝頼の足下に泣伏した。その聲を洩聞いた八重垣姫は襖の隙から窺ひ、我夫か勝頼様かと飛立つ心を抑靜め、又繪姿と見比べた上、矢張眞の勝頼様ぢやと走り出て取組む。勝頼は何處迄も簀作の積り、勝頼などもは覺え無しと云ふので、姫は濡衣に向ひ、もし其方の知邊でも殿御でも無いなら、どうぞ仲介を頼む。そこで濡衣は、仲介せまいものでも無いが、まこと心底からの御執心なら慥な證據が見たい、其誓紙には諏訪法

性の御兜を盗み出して貰ひたい、と云ふ。さては兜を盗めとは、これこそ眞實の勝頼様に違ひはない、と喜んだ姫は男に縋り泣く。が、勝頼は心強く打明けぬ。そこで姫が自害せんとするを濡衣が留め、此簀作こそ眞の勝頼なりと初めて明し、つと姫を突遣つた。姫は嬉しいやら恥かしいやら。

折から奥に聲あつて館の主長尾謙信文箱拂へ現はれるので、勝頼の簀作は其文箱を受取つて鹽尻へと急ぐ。其の後姿を見送つてゐた謙信、聽て白須賀六郎を呼出すと、鹽尻までは陸路の絶所、油斷して不覺をとるな、と警めて勝頼の跡を追はせ、原小文次に後詰を云付けて急がせる。この物々しき人衆は、總て武田勝頼を討手の爲と知つて驚く姫と濡衣。而して濡衣は、武田方の廻し者として謙信に引き立てられる。

西亭謹作並作曲

軍空神の愚

ぶ

倂

母キミ 刀自 豊竹呂太夫

加納 俊夫 竹本濱太夫

田鶴子 夫人 豊竹松太夫

安 造 竹本隅若太夫

役場 吏員 豊竹千駒太夫

豊澤 仙糸

野澤勝太郎

人形

母キミ 刀自 吉田 榮三

安 造 吉田 玉市

加納 俊夫 吉田 玉助

田鶴子 夫人 吉田 榮三郎

役場 吏員 吉田 小兵吉

床本

神風の彌生の空を吹きなびく、春は越路へ歸るなる雁の渡るか二聲三聲、花も朧に暮れ初むる餘寒の町の所澤、木の香漂ふ新開の家居も親子水入らぬ樂しまどるも十歳ぶり母は仕度くに餘念なき、煙も細き裏道へ心安造枝技戸開け、ハイ御免なはりませ、と云ひつ

つは入ればヲタこれは安造さまか、サアまアどうぞ、アアもお構ひ下さりまするな、實は北海道の兄貴より加納さんにもお上げて呉と云ふて、鮭を送つて來ましたで、珍しくもないでせうがほんの少し計り、それはまア結構なもの、倂か歸つたら喜びませう、離れ

てゐてもお心添へ早速御禮出しませういつも貴方にはお世話になる計り、何の御隠居様、兄はいつも申して居りました、屯田兵で北海道へ入植した營座は、亡くなられた加納さんに随分お世話の爲にした萬分の御奉公、丁度今日は亡夫の命日、故人も地下で喜んで居りませう。アそうく奉天でお戦死なされた今日は陸軍記念日、こりやまアお精進日に、えらい物持ち込みましたわい。イエく主人の大好き物、決めて喜んで居りませうに。ヲ、幸ひ、と申しては濟みませぬが、どれ一寸お参りさして頂きませう。これはまアお心づか

ひ、さあ／＼どうぞまア是へ、とつい
と立つて母親は、佛壇代りの違ひ棚、
祭る寫眞にお明りも淡き灯影の小石
道、心も加納敏雄少尉いそ／＼として
家に入り、おツ母さん只今、敏雄がお
歸りかい。ハイ遅くなつて済みませ
ん、オツ安造さんですか、毎度母がお
世話になります。これはお歸りなさい、
日々御苦勞様です。敏雄や今日はの、
結構なお前の大好物を頂きましたぞ。
そうですか、いつとも御心配に預り
有難う。イヤ今日のお父さんの御命日
をうつかりして、生ぐさ物持つて來ま
したで、今お寫眞にお詫びして居りま
したわい。イヤ／＼お詫び所ぢやない
よ、親父も好物、寫眞が禮を云つて居
りますよアハ……。これはどうも、し
たが、貴方の御評判がよいので、其方
が嬉しいでせう、ねえ御隠居さん、そ
れにしても毎日の御訓練さぞお勞れで

しよう、併し日本も進んだものではな
随分種々澤山の飛行機が有りませう
な、今日は、いつもと違ふ飛行機が飛
んでゐる様ですが、ありや今度の新型
ですか、何と云ふんです。と問へど
答へも無き少尉、此方は安造、口輕々
氣も輕々と猶續け、日本の飛行機で一
番速いのはどれ程の速さです、米國あ
たりの飛行機に負けんのも出來てゐる
せうな、今日日本に何臺程實際數がある
のかなア、此所澤の航空兵だけでも私
の目算ではマアと安造は、振子の虎の
首ならぬひねりくねらす胸算用、指折
り數へ云はんとす、途端に大喝加納の
一聲、黙り給へ、君はスパイか、軍の
機密を胸算用、そのままにはさし置か
ん。と軍刀つかみ立ち上り、顔色變れ
ば安造驚き、ト、とんでもない、わ
しや日本人ぢや／＼ナ、何もそんな
つもりで、と身もがた／＼、春の雷初

鳴りに猫の驚く如くなり、敏雄は思は
ず、ハハハ……。冗談だよ安造君、一
寸野口教官殿を眞似て見たんだ。エ、
ア、吃驚りした。怒り顔見た事のない
貴方故驚きも百倍でしたよ、アア熱い。
ハハハ……。赦し給へ、併し安造君、軍
の事は云はずもがな、事國防に關する
事、例へ些事たりとも、口にすべから
ず、敵性國に洩れたらば、それこそ大
なる結果を來す、防諜精神鐵石堅固で
なくちやいけませんよ。云はれて安造
頭をかき、やこ奴はうつかりあやまり
だんまりだ、好きな義太夫にも云ふて
ありますよ、それ蟻の穴より堤も崩る
る輕い様でも重い事、ひそ／＼云ふて
人も聞くとね、知らぬ／＼と眼を怒し
て石の上なる達磨さんだ、マハ、濟み
ませんそんなら暇な致しませう。安
造さん足許に氣をつけて、アお内儀さ
んのお目出度は來月かえ。オツと御隠

居さん、それも防諜何事も云はざる見ざる聞かざるの庚申宵の朧月町に去る影見送る母。ホンニまあ、いつも面白入、サアお前空腹だらう、ドレこしらへませう。イヤ残念ながら今日は矢島などと用事の都合で食事を共にしましたので。ヲ、そふかい、そんならマアお茶など入れませふ。と差し出す茶花も温かき母の慈愛のうるほへり。ホンニそれ／＼今日近所の奥様達より聞きました、今度の卒業式に成績も一番とかで、畏れ多い事ながらお天子様の御前で天覽飛行の光榮にも浴するとか何にも云はぬものだから、私しや却て赤面したよ。エ、そんな話誰方がしたですか、イヤ未だ確定した儀でもないんですが、よし又さうでも、早く話して御心配かけるのは悪いと思ひ、申し上げぬつもりで居りました。何のお前、お前の光榮は加納家の

光榮、亡き父も、又お前の事を案じて死んだ農夫や兄も、どれ程喜ぶ事か、うんと頑張つておくれ、其時は見苦しい態度を見せぬ様に。ハッ責任の重大は痛感して居ります、戦時にあるも平時にあるも責任觀念に二様はありません、最企の努力を盡して、お父さんにも、又厚恩の兄さんに對しても、笑はれぬ様致します、併お母様軍人は、別して航空兵は平時も戦時もありません、イヤ萬々大丈夫ですが、それまでも萬々一其時は數かず願ひます、只其時の先立つ不孝は前前てお詫び致して置きます。と健氣に放つ言葉の矢。かへらじとかねてぞ思ふ梓弓、丈夫男の雄々しきは實にや楠氏の後裔の面影實に現はせり、ヲテ良良く云ひました、それでこそ加納の子なれ、我が子なれ、何の母は歎きませふ、加納家の先祖は楠家の御意志を汲む、南士の家、

君に捧げまつたからは、我が子であつて我が子でない、死すべき時に死してこそ武人の譽れ、君に忠なり親に孝、だが犬死にはなりませぬぞ。ヲホホ：それでば／＼寝むとしませう。ハイ、おつ母様お先へ、私は未だ調べものの整理を致します。さうかい、では風引かぬ様にの。と取り出す丹前着がへもの、情もこもる春の夜を鐘の響きもおぼろなる、淡き一間へ入る母の夢路樂しく更けて行く。

月さへいつか水無月に、まだ名残り降る五月雨の小止む朝空明け暗て、暗きつれたはむ群雀に目覺めしか母のしわぶき聲田鶴子はそれと、お母様、お目覺めでござりまするか聲に母親つくろい出で、ア少し寝過ぎましたかな、子供達は。ハイ、元氣で登校致しまし

た。それは、イヤ思ひがけない夢を見てつい寝過しました。とは、どの様なお夢。敏雄の夢、それも、モウ十四五年も前の夢、敏雄が飛行學校時代の夢ですよ。おや、それはお懐しい事、ではモウ少しお寝みなら戦地のお夢も見ませうものを。ほんにさうでしたの、どれ顔を洗ふてから、ゆつくり朝餉の話の楽しみ、と母は彼方へ立て行く何氣なけれど聞く妻の胸にあやなす紛れ糸柳の風と流せども騒ぐ血筋ぞ一つなる、まづ片づけと立上る、折ふし表へ足音して、御免下さいませ、加納様のお宅はこちらですか。訪のふ聲に妻田鶴子、ハイ、加納敏雄の宅でございます。私は役所の者、エー如何申して宜敷きやら、誠に、エー誠に今度は、御主人様。云ひつつ一書取り出す。エツ、夫が。ハイ、何れ隊より公報が有りませふが、去る五月廿二日に、云

ひも終らぬ一瞬に、かねて覺悟も遺實に、それとさどりと居すまい正し。若しや、病死では。イエ、名譽の御戦死立派な御最後の由、我等國民として衷心哀悼申し上げます。言葉少なに口裏に心の誠現れし。左様でございまするか、それ承り安心致しました、夫も定めて満足に御柩と散つた事と存じます、御鄭重なる御言葉有難うございしました。それでは、何れ改めてお伺ひ致しますれど、今日はこれにて失禮致します。云ふも濁りの言葉墨辭を低ふして役所人、曇る思ひに五月雨の心を空に歸り行く。見る妻の後影、それともれ聞く母親の、夢路を忍ぶ眼の内に嬉し涙の一滴。ア、お母様田鶴さん：。お覺悟は：。出来て居ります：。田鶴は軍人の妻でございます：。お母様：。心配なく、私も加納の母です。ハイ。サア御奉告致します。と

母は御明かし神棚へ、妻は寫し繪取り出だし、在りし面影今更に偲ぶも過ぎし夢の空、手向くが如く若鷺の。田鶴さん、アノ飛行機の音、伴は今も生きて居りますのふ。ハイお母様、家にも三人の子供達、未だ、第二第三の加納は生きて居ります。ほんにのふお前さまもこれからがまこと日本の母ですの。笑顔に交す胸と胸、目と目に隠す一露も、悲し涙は宿らねど、嬉し涙を拭ふ目に、兒を育みの老雲雀、啼く音に啼るる五月空眩し陽影の輝けり。

× × ×

× × × ×

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段



辨慶上使の段

切 竹本大隅太夫

鶴澤清二郎

梗概

元文二年一月竹本座に上場された文耕堂、三好松洛の合作になり、全五段もので此の「辨慶上使」は第三段目に當る。作全體の内容は、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が義經の間罪使として上洛する。然して梶原は義經を陥れて己の非を蔽はんとする企みであり、又土佐坊はこれを知つて、義經を庇護せんと心である。斯くて二人の入洛に依つて、義經主従と此の二人の間に様々の葛藤波瀾を起すと云ふ筋である。

ここは侍従太郎と呼ぶ人の館である。此の侍従太郎と云ふのは平朝臣

時忠卿の執權職で、時忠の姫君で、今は義經の北の方となつてゐる卿の君の乳人である。

卿の君は義經の胤を宿して懐胎中なので、保養を兼ねて此の侍従太郎の館に假居してゐるが、丁度其頃、義經は平家を滅して、堀川御所に飛ぶ鳥も落す勢であつた。處が義經の兄頼朝は生來疑心深く、義經が平家方たる時忠卿の娘、卿の君と結婚したのは、若しや自分に謀反でも起す下心からではないかと不審を抱き、その申し聞きには卿の君の首を打つて出せとの難題を云ひかけた。そして此の侍従太郎の館へ

人形

卿の君 吉田玉男

侍従太郎 吉田玉徳

妻花の井 桐竹紋太郎

腰元しのぶ 桐竹紋司

女房おわさ 吉田光造

武蔵坊辨慶 吉田玉助

は、その首を受取りに武蔵坊辨慶を寄越すことになった。

卿の君は太郎の妻花の井、腰元しのぶや、久し振りに訪ねて来たその母親のおさを中に、大勢の腰元共とうち興じてゐたが、其所へ上使として辨慶が来たのである。

そして何か重大な要件でもあるのか辨慶は太郎共々奥の間へ――。續いて卿の君、腰元共も――。

後におわさと、しのぶが、懐し氣に母娘相見る歡喜に浸つてゐた。

暫くして、浮かぬ様子の侍従太郎と妻の花の井が現はれ、おわさに向ひ、今日の辨慶が上使の仔細を語り聞かせた。それに依れば、辨慶が今日の役目は、卿の君の首を打つ事であるが、そ

れは忍びぬところである。其所で誰か身代りと云ふので考へ付いたのは腰元しのぶ。年頃と云ひ器量と云ひ、首打つて頼朝公に卿の君と言上しても、よく疑はれまい。何卒しのぶの命を、お主の身代りに立たいと云ふのである。然しおわさは、それを拒んだ。一方しのぶは、お主の爲に死ぬと云ふ。其こでおわさは、しのぶを殺す事の出来ぬ譯があるとて、自分の左の肌を脱いで振袖の片端を出し、十八年以前、頃は夜も長月の廿六夜の月待ちの夜、二八餘りの稚兒姿の知らぬ男と契つた物語をし、「假り寝の情は浅けれど、妹背の縁や深かりけん……」その月より身も重く、産み落したのが此の娘しのぶで、今日まで母娘が憂き苦しみも、如何にもして知らぬ父に娘を逢はせた

く、其の夜のかたみの此の振袖を便りに、父親を探してゐるとの涙の述懐。

おわさが語り終つて、娘を連れて立つとうとする時であつた。突如、障子越しに刀が突き出て、娘しのぶの背を扶つた。皆がアツと驚く途端、悠然と現はれたのは、黒地に輪寶の模様の大紋を着けた、今日の上使武藏坊辨慶であつた。そしてこれほど驚く皆の真中にどつかと坐し、

「これには深い仔細のある事、これ見よ」と、我が身の片肌を脱いだ。

と——これは意外、おわさが片見の振袖と、對の模様の紅の大振袖の伊達模様、十八年前におわさが假寝の契を交した稚兒播州書寫山の鬼若丸、おわさが多年尋ねる戀しい夫、又しのぶが片時も忘れぬ臉の父こそ、この武藏坊

辨慶であつた。

辨慶は、しのぶは我が娘なれば、主君の身代りに立てるのだと話した。

おわさは始めて總てを納得したが、手負のしのぶは仔細も知らず、現在生みの父の手にかかつて息絶へた。

おわさはしのぶの死骸に取り絶つての愁嘆——追に辨慶も、父として名乗りもせず、我が手に愛しい娘の命を奪つたことの悲しく、

「生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が三十餘年の溜涙一度に亂すぞ果しなき……」

泣きに泣いた。

ややあつて時計の音。

辨慶は心を取り直し、從侍太郎に娘の首を打つて渡せと云ふ。太郎はしのぶの首を落すと直ぐに、自分も腹かき

切り、卿の君の乳人侍從太郎の首を添へて差し出せば、よもや頼朝公も賀首とは思ふまい——と、潔よき最後を遂げた。

辨慶も如何にもと領き、太郎が首を打ち、二つの首を白布に包んで、左と右に抱きかかへ、

「卿の君の御首、侍從太郎の首諸共、武藏坊確に取つた——」

と、呼ばはり、おわさ、花の井の名残りを惜しむを振りすてて、堀川御所へと歸つて行つた。

× × ×

× × ×

双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

中

竹本七五三太夫

鶴澤綱造

切

鹽竹古瓢太夫

鶴澤清六

これは寛延二年七月、竹本座上場の竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作の全九段からなるものである。

尚本曲は、享保三年正月竹本座上場の近松門左衛門作「壽の門松」及び享保十年正月豊竹座上場の西澤一鳳、田中千柳合作の「昔米萬石通」とを、併せて趣向を立てたものと云はれてゐるが、第二段の相撲の場、第四段米屋の場、第六段橋本の場、第八段引窓の場（今回上演のもの）が最も有名である。

當時浪華に知られた關取に、濡髮の長五郎と云ふのが居たが、長五郎はかねて山崎與次兵衛には、一ト方ならぬ恩誼を受けて居たので、その若旦那與五郎が、藤屋の遊女吾妻を身請けするに就いては、双肌ぬいで奔走を続け

てゐた。

處が此の吾妻には、郷右衛門と云ふ武士も亦執心で、此の方にも身請け話を持ち上つてゐたが、それには放駒の長吉と云ふ關取が、肩を入れてゐた。

折も折、土俵の上の顔合せが、濡髮と放駒と云ふ事になつた。互ひに人氣相撲のこととて、双方の最眞の聲援はもの凄く、小屋もわれんばかりの盛況であつたが、此の時の勝負に濡髮は、熊と勝負を振つてやつたのだ。それは云ふまでもなく、吾妻の事を宜敷く放駒に頼みたい爲からであつた。

だが、勝ち誇つた放駒は、一向素知らぬ顔でゐるのだ。二人の間は喧嘩になつて、遂には茶碗の機が飛んだ。怪來喧嘩好きの放駒は、茶碗のかた

人形

十次兵衛の母 吉田小兵吉

女房 お早 吉田文五郎

濡髪長五郎 桐竹門造

平岡丹平 吉田玉徳

三原傳藏 桐竹紋太郎

南方十次兵衛 吉田榮三

をつけると云つて、濡髪を我が家へ呼
び寄せて、喧嘩をしかけたが、放駒の
喧嘩好きを心配してゐる姉のお蘭は、
講中の衆を頼んで、長吉に盗人の汚名
をつけ、その不心得を意見した。

又一方長五郎も、共々意見をするの
で、始めて長吉の心も和らぎ、此所に
濡髪と放駒は目出度く和解して、改め
て腕の血をすすり合ふ仲とまでなつ
た。

その後のこと。濡髪の長五郎は、フ
トした事から廊で人を殺め、お尋ね者
となつて逃れて行つたのは、八幡村の
南方與兵衛の家であつた。

與兵衛の義理ある母お幸は、長五郎
の實の母である。

苗字帯刀まで許され、村方の取締を

する南方與兵衛は、既に人相書まで廻
つてゐる此の長五郎を、召し取れば大
手柄になるのだ。

併し、母の心を察しては、義理ある
兄弟に無下にも縄はかけかねた。とは
云へ、暮六つ過ぎれば與兵衛の役目は
どうしても長五郎を見逃しには出来な
いのだ。

與兵衛の女房お早も、夫の心をそれ
と知つて、引き窓を開けては、熊と未
だ日が高いと云ふが、母のお幸は退我
が子の恩愛に引かされて、長五郎の前
髪を剃り落すと、人相を變へて落して
やつた。與兵衛も亦、手裏剣を打つて
長五郎の片頬の黒子を落すが、それも
義理ある兄弟を助けん爲の、厚い心に
他ならなかつた。

壺阪觀音靈驗記

澤市内より壺阪寺まで

澤市内より壺阪寺まで

座頭 澤市 竹本相生太夫
女房 お里 竹本南部太夫
觀世 音 竹本越名太夫

ツ

野澤吉五郎
鶴澤重造
鶴澤友衛門
豐澤園伊三

豐澤仙三郎

竹澤園作

鶴澤清廣

解説

「三つ造ひの兄さん」として有名なこの淨瑠璃は明治になつてから出来た作で、近代の作としてこれ程流行を極めて居る曲は他に見當りません。それは作柄よりも主として作曲によるもので、作曲者近世の名人豊澤園平の力に負ふものであります。作詞者の名は傳はつて居りませんが、現在の詞章は園平の妻ちか女の補筆によることは確かであります。

最初園平の節付によつて壺阪を語つたのは明治十六年十月、大江橋の席の島太夫でありますが、二度目に世話の名人住太夫を経て越太夫に傳はり更に先代大隅太夫に傳はりました。大隅太夫がこれを語つた時、園平は更に節付を改作し、現在の様な派手

な手かはじめて付けられたのであります。以來この曲は人氣に投じ大流行するに至りました。

流石近代の作曲だけあつて、その節付は實に緻細に流麗に巧緻をきばめて居ります。語り出しの地唄「儘の川」にしても、澤市の歌「菊の露」にしても、又例のお里のクドキ「三つ造ひの兄さん」或は段切れの「お禮参り」の萬歳唄いづれも、初代園平の才能をよく察知することが出来るのであります。

歌舞伎狂言で致します時に、悪者鴈九郎などを書き加へて居りますが、人物はお里と澤市、それへ觀世音だけ、場面も澤市内と御寺と谷底のみ、至つて簡単な短篇であります。淨瑠璃中の佳品の名に背きません。

梗概

澤市内より靈阪寺の段

人形

座頭 澤市 桐竹政龜

女房 お里 桐竹紋十郎

觀世 音 桐竹紋司

大和國靈坂寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた。それが盲目の澤市には祓かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜セツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はす男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し盲目の自分の身を考へるとき僻みさへ加はつて、いつそ黙つて居やうとも考へた。

とある夕方である。澤市はいら／＼する胸をしづめて、遣る瀬ない三味線を弾いてゐた。

「鳥のこえ、鐘の音さへ身にしみて思

ひ出す程なみだが先へ……」
澤市は自分でこの唄がかなしかつた。

めづらしく三味線などを弾いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのこととお里に云つてしまはう、澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事たちを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。

それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。

譯はかうだつた。澤市とお里は従兄弟同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は抱瘡にかゝつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤

市の眼病平癒のためこの三年の間と云ふもの雨の夜も雪の夜も壺坂の觀音へ跣足詣りをつづけて居たのだつた。

それと解つてみると澤市は貞節な妻の前に自分がならべた邪推がはづかしかつた。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。

すべてを打開けたお里は、澤市の心を引立てゝ一緒に觀音へ參詣してみたら、とも云つた。附甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたい、と澤市は思はないでは居られなかつた。

何時の間にか夜になつた。お里に手を取られた澤市は險しい坂道をやつとのことで壺坂の觀音堂まで辿りついた。二人はつゝまじやかに西國六番の札所此處壺坂觀音の御寺に額づいて御詠歌を上げた。

この眼が癒るものか、癒らぬものか三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその支度にかへ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居たのだあの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても、所詮に治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。

杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人残して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつて見ると夫の姿は見えない。呼べど叫べど松風と谷の音ばかり、お里は狂氣の様に澤市の行方を探ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覚えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にあり／＼と澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を

失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあたつた。何處からともなくかほる靈香、妙な音楽につれあり／＼と姿を現じ給ふたのは壺坂の觀世音だつた。

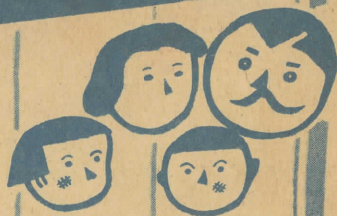
觀世音は澤市、澤市、お里、お里、と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた様に眼を開いた。お里の貞心に佛も感じ二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼も開いて居た。觀世音は、三十三所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ残して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ様も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

[illegible]

昭和十八年六月廿八日印刷
昭和十八年七月一日發行
東京市豊島區池袋町三丁目一四二二
編輯兼發行人 茂 笠 靜 夫
東東二〇四

スプロド油肝^{ニツワ}



一家総はりぎり

無病息災

戦場は吾々の身近かに續いております。最後の勝利を

確保する迄、一億同胞みな健康であらねばなりません。増産に挺身する人も勉強する人も、家庭を護る人も、こぞつて張り切つた生活をいたしましょう。

不足がちな栄養を総合的に攝取する必要があります。本剤は各種の栄養素を多角的に

含有し且つ完全乳化してありますから胃腸障害を起す心配もなく吸収いたします。

毎日一顆——二顆

ニツワ石鹸本舗薬品部

許 特 賣 專

ラオゼ

磨 齒 用 藥



生活の
科學化は
手近から

主劑ゼオライトの持つ吸着・置換・收斂の三大科學作用は豫防齒科醫學多年研究の所産であり、齲齒の所産であり、齲齒の完全豫防と同時に、齒根の強化を圖り、咀嚼力を強化いたします。

私共の生活に科學性を取入れる事は、最も必要な事です。徒らに遠大な物を希まづとも、まづ最も身近にあるものから心がけるべきで、例へば、朝に夕に私共の生活に親しまれてゐる齒磨の科學化こそ手近で且つ有効的です。

こんなお方は
ぜひゼオラを！

- 1 齒を強く美しくと望む方
- 2 林檎を噛むと血の出る方
- 3 齒刷牙を使ふと血の出る方
- 4 むし齒が多くて御困りの方
- 5 咀嚼力が不充分で困る方
- 6 在來品に御不満の方

錢八廿 共稅



定價部金貳拾錢

部 品 藥 舗 本 齋 石 ワ ツ ミ